

イタリアの幼児教育における生活体験学習の視角と方法

東内, 瑠里子
佐賀女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/9058>

出版情報：生活体験学習研究. 5, pp.15-20, 2005-01-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



イタリアの幼児教育における生活体験学習の視角と方法

東 内 瑠里子

A Research on the Points of View and Methods of the Life Needs Experience Learning in the Italian Preschool Children's Education

Tonai Ruriko

要旨 イタリアの幼児教育は、いま世界中から注目されている。その一つが、自治体の保育計画に対して脚光を浴びているレッジョ・エミリア市の実践や、世界で最も地方自治が進んでいるといわれるボローニャ市の実践のように、地域生活を住民相互で支える思想と幼児教育の結びつきへの注目である。さらに幼児の発達阻害の状況に対して、100年以上前から生活体験を教育方法の支柱としてきたモンテッソーリ教育への新たな注目である。

そこで本論では、イタリアにおける幼児教育について、①地域生活を支える思想と幼児教育との結びつき、②モンテッソーリ教育における「しつけ」、の二点に焦点をあて、生活体験学習がどのように位置づけられ、またどのように行われているのかについて明らかにした。

キーワード 豊かさのひずみ、一体的全体性、幼児の生活体験、幼児教育施設の社会的運営

1. 本研究の課題

イタリアの幼児教育は、いま世界中から注目されている。その一つが、自治体の保育計画に対して脚光を浴びているレッジョ・エミリア市の実践や、世界で最も地方自治が進んでいるといわれるボローニャ市の実践のように、地域生活を住民相互で支える思想と幼児教育の結びつきへの注目である。さらに幼児の発達阻害の状況に対して、100年以上前から生活体験を教育方法の支柱としてきたモンテッソーリ教育への新たな注目である。

そこで本論では、イタリアにおける幼児教育について、①地域生活を支える思想と幼児教育との結びつき、②モンテッソーリ教育における「しつけ」、の二点に焦点をあて、幼児期における生活体験学習がどのように位置づけられ、またどのように行われているのかにつ

いて明らかにしたい。

2. 幼児教育を支える「社会的運営」の思想

1) 地域施設の「社会的運営」

イタリアの特色は、地域的多様性である。それぞれの地域の中心都市を文化の中心とし、自らのアイデンティティのよりどころとするイタリア人の心もまた、広く知られている⁽¹⁾。地域へのアイデンティティの形成と、世界をリードする新しい幼児教育実践は、因果関係があるのか。親や地域の人々との連携を容易にし、その地域の生活に沿う形で、保育内容が創り上げられていることを生活体験学習の視点から捉えなおし、その内実を明らかにしていきたい。

イタリアにおける幼児教育施設⁽²⁾の性格は、北部と南部で大きな違いがあると言われる。これは地方分権

化における州政府の政策実行の違いによるものである。レッジョエミリア市の実践や、ボローニャ市の実践などは、地方分権が早くから進んでいた北部イタリアのエミリア・ロマーニャ州で興った。

1960年代、エミリア・ロマーニャ州では、住民の生活に直接関わる施設の運営をその地域に住む人々相互で支える「社会的運営」という共同の精神が培われた。「社会的運営」とは、地域生活を支える諸機関の運営を、行政だけでなく、日常生活の基礎単位である住民の代表者組織が、生活現実をつきあわせて運営の中身を議論し、運営にいかす仕組みである。住民代表の諸機関・組織は、行政の諮問機関のような役割を果たす。

例えばボローニャ市は、住民組織が権限をもつ地区住民評議会、学校評議会、保健協議会、地元の多種多様な任意団体（文学協会、地方楽団、狩猟クラブ、生活協同組合）の活動が活発であり、さらに「人民の家」

(Case del popolo) の設置率が、イタリア全土で最も高い。「人民の家」は、イタリア独特の民主的地域施設であり、政治、文化、スポーツ、レクリエーション、娯楽などの活動を通して、住民同士が関わり、住民自治の意識を形成させる役割を果たしている⁽³⁾。

このような住民の民主的組織が網の目のように活動し、社会生活を支えているのである。地域の生活を住民同士で支え合う思想のもと、生活の一部である幼児教育も当然のこととして支えられているのである。幼児教育施設の事柄については、特に、住民のかわいい子どもや孫に関係が深いことであるため、非常に関心が高いと言われている⁽⁴⁾。

2) ボローニャ市幼児教育の先進性

ここではボローニャ市における実践に焦点を当ててみたい。ボローニャ市では、保育ニーズの多様化が進む中でも、政策的・実践的努力によって、97%の保育ニーズが公的に満たされている⁽⁵⁾。保育の他にも、乳幼児を対象とした「遊びセンター」や「親子センター」など、親子のふれあいの場や妊婦の相談サービスなども積極的に行われている。

ボローニャ市保育行政は、費用に対する支援を積極的に行うが、運営に対して規制することは少なく、保育の中身に関わる多くのことを、9つの「区」に分権している。ボローニャ市保育行政課長によると、「区」

それぞれで地域特性と生活感覚が違っており、生活に密着するサービスである保育サービスは、生活者である住民が一番よく理解しているという認識のもと、幼児教育施設の運営を、事実上9つの「区」に分権している、という⁽⁶⁾。

一方、幼児教育施設にとっても、行政と住民は、保育内容の提案主体として位置づけられている。例えば、ボローニャ市にある9区の住区住民評議会は、それぞれ市の財源補助事業によって、市民協会や生活協同組合などの任意団体と協力しながら、多様な試みを幼児教育施設に提案している。具体的には市民協会プロジェクトとして、「外国語を学ぼうプロジェクト」、「パソコン教育プロジェクト」、「ミュージアムプロジェクト」、「口語障害プロジェクト」、「子ども劇場プロジェクト」、「地域精神活動プロジェクト」などである。生活協同組合からは、シコモストリスタ（精神心理療法士）が来園し、幼児の体をほぐし、気持ちを高める運動「セユモトーレプロジェクト」（精神及び、運動プロジェクト）が行われている。「セユモトーレプロジェクト」は、10数年前から、イタリアの幼児が、飛び跳ねて遊ぶ時に床が怖い、袋をかぶると怖いなどを訴えることが目立ったため、自分の体を自分でコーディネートできるよう、心理・運動機能を高めるために提案されたプロジェクトである。このような各組織からの提案プロジェクトを、実行するかどうかは園の権限において決定でき、実行する場合は、実施希望の園だけが補助金を申請、実施するシステムとなっている。

他にも、地域での学童保育は、「人民の家」において活動しているボランティア団体が支えるなど、共同の精神があるからこそ、幼児教育を家庭と地域で支えることが可能となっている。

レッジョエミリア市もまた同様に、地域の支援によって幼児が地域の産業であるブドウ狩りを体験し、造形や表現に活かすなど、豊かな保育内容を創り上げている。このようにイタリア北部における幼児教育の先進性は、「社会的運営」の思想を基盤に展開してきているといえる。

3. 幼児教育政策からみた幼児の生活と発達

次ページの写真1は、ローマ市の「子どもの家」で、活動の時間中も眠り続けている4～5歳児の様子を撮



写真1：活動の時間になっても目が覚めない幼児

影したものである。食べていない食事が、机の上に置かれている。他の幼児は、別室で活動が続けていた。自分の休みたいときに休むという、イタリアの保育の文化が影響している可能性もあるが、活動時間にも眠たくなってしまふ幼児の生活リズムの乱れがうかがえる。

前述したように、イタリアの幼児教育は、家庭や地域の連携が活発に行われてはいるが、幼児の発達への危機に対する認識は、日本と同様である。

イタリアは日本と同様、1950～1970年代にかけて、西欧諸国随一の高度経済成長を経験した。ここでは、「何百万というイタリア人が、仕事を変え、古い家を後にし、生活様式も変えた。イタリア、そしてその大半の州や市民は、未曾有の大規模な社会変動を経験したといわれている⁽⁷⁾。家族形態の変容、農村共同体の崩壊は、日本と同様、幼児の生活へも大きな変容をもたらした。

このような幼児の生活環境の激変を受け、国立幼稚園法（1968年）が制定され、日本より20年後発ではあるが、国家的な幼児教育への着目が始まった。さらに近年の学校評議員制度（1976年）、改訂幼稚園教育要領（1991年）の導入によって、中央集権から地方分権へと、イタリアの幼児教育は、ドラスティックな転換を遂げている。

まず、イタリアの幼児の生活と発達、教育政策においてどのように捉えられているか。ここでは1991年施行された新幼稚園教育要領（表1）をみていきたい。このことについては、前之園の指摘が参考になる。前之園は、イタリアの新幼稚園教育要領が捉えている、幼児の発達における現代的課題を、物質的豊かさのひずみの克服、そのための知的・身体的に切り離し得ない「一体的全体性」への着目としてまとめる⁽⁸⁾。

「イタリア社会の変化は、日本と同様、急速かつ複合的であり、理念的な児童中心主義の主張は、物質的な現実によってたえず否定され続ける。幼児は、物質的豊かさを通して、量的には多様な経験に遭遇する機会に恵まれている。しかし、その経験の内実は、質的、認識的に貧困化されたものに過ぎない。マス・メディアは、子どもに認識のゆがみや受動性をもたらし、それが生産する概念化や画一的な表現は、創造性に消極的な影を落としている。このような状況の中で、一般に、現代の子どもは、内面的な満足や自己充足感を持ちにくくなっている状況にある。そこでイタリアの幼稚園教育要領では、『権利の主体としての子ども』が強調されることとなった、という。」⁽⁹⁾

このように新幼稚園教育要領には、子どもの発達環境におけるメディアの問題と幼児の創造性の貧困化、主知主義への偏重と知的・身体的に切り離し得ない子どもの発達の『一体的全体性』の問題について新たに明記されるようになった。日本の幼稚園教育要領と比較しても、幼児の現実生活への着目の仕方は、卓越したものであるといえる。

理念的な児童中心主義への批判から、現実の幼児の姿を通じた現代的課題へのアプローチの重視は、地域の生活にそった幼児教育実践を生み出す契機となっているといえる。

4. モンテッソーリメソッドの今日的役割～集団の中での「しつけ」～

このようにイタリアにおける幼児の発達に対して、基本的な生活習慣の獲得やしつけの問題、つまり幼児の生活体験の問題に焦点を当ててきた教育方法として、モンテッソーリ教育が挙げられる。イタリアのモンテッソーリ教育が、現代の幼児の生活に沿って、どのような展開をみせているのかについて、ここではイタ

表1 【新幼稚園教育要領】⁽¹⁰⁾**第1章 「幼児、社会、教育」**

1. 変化する社会、2. 幼児と家族の条件、3. 諸権利の主体としての子ども、4. 生活環境と教育的文脈

第2章 「幼児と学校」

1. 目的、1.1 同一性の成熟、1.2 自立性の獲得、1.3 能力の発達、2. 発達の諸側面、3. 表象的・文化的体系、4. 教育的連続性、5. 多様性と統合

第3章 「教育課程」

1. カリキュラムと学習計画、2. 教育的経験の諸分野、2.1 身体と運動、2.2 お話と言葉、2.3 空間・秩序・大きさ、2.4 モノ・時間・自然、2.5 メッセージ・形・伝達手段、2.5.1 図形的・絵画的・造形的諸活動、2.5.2 ドラマ的・演劇的活動、2.5.3 音響的・音楽活動、2.5.4 マス・メディア的教育 2.6 自己と他者

第4章 「教育方法、教育組織」

1. 方法の一般的原理、1.1 遊びの利用、1.2 探索と調査、1.3 関係の生活、1.4 教育的仲介、1.5 観察・計量化・確認、1.6 記録、2. 教育の組織化、2.1 クラス編成、2.2 日常生活的諸活動、2.3 空間の構造化、2.4 時間の文節化、3. 専門性の組織化

リア・モンテッソーリ協会 (Opera Nazionale Montessori) に対するインタビューと、ローマ市にある国立「子どもの家」(Case de bambino) の観察から明らかにする⁽¹¹⁾。

モンテッソーリ協会によると、家庭の教育力の低下は、イタリアにおいても問題になっているという。またテレビやパソコンの普及や外遊びの減少、幼児の体力の低下など、日本と同様の課題を抱えているという。幼児の発達と低体温の関係はあまり着目されていないが、発達と脳の問題は関心を呼んでいるという。日常の生活に関わる具体的な経験に乏しく、『ライフハザード』や『5感喪失』とも言われる現代の幼児の姿は、同じような産業構造の変化による生活環境の変化を経験した、日本もイタリアも変わらない。モンテッソーリ教育は、いま、どのような役割を果たしているのだろうか。

マリア・モンテッソーリがローマ市の貧民街サン・ロレンツォの町に、モンテッソーリ独自の教育方法であるモンテッソーリ教育を行うために「子どもの家」を建設したのは、1903年のことである。モンテッソー

リ式幼稚園は「子どもの家」と呼ばれ、その遊びを「作業」、ままごとを「日常生活練習」、おもちゃ遊びを「教具による感覚練習」と呼んだ⁽¹²⁾。長い歴史を持つモンテッソーリ教育だが、この手法を現代的に見ると、生活体験学習のプログラムとして位置づけることが可能である。現代の幼児のおかれている時代状況、生活様式を考慮し、改めて今日のモンテッソーリ教育の内容を生活体験学習として着目する必要がある。

ローマ市にある国立「子どもの家」は、3～13歳までが、モンテッソーリ教育を受けることのできる国立施設である。入所基準は、試験による選抜ではなく、経済的に貧しい子どもを優先的に入所させるシステムとなっている。国立「子どもの家」のプログラムは、表2の通りである。モンテッソーリメソッドは、「作業」、「日常生活練習」、「教具による感覚練習」⁽¹³⁾を、異年齢や友だちとの関わりに配慮しながらプログラムされている。

モンテッソーリ教育は、幼児の「しつけ」を家庭だけに任せるのではない。集団保育の場であるからこそ可能な方法で、基本的な生活経験の機会を提供してい

表2 国立「子どもの家」保育プログラム (2003年10月3日)

8時20分～	登園。上着をエプロンに着替える。自由遊び。
10時00分～	自由保育活動と昼食の準備 (14名) に分かれる。自由保育活動の幼児は、教室の中央に置かれているモンテッソーリ教具で、遊び方を間違えないように遊ぶことができる。お昼寝も可。昼食の準備係は、昼食の準備に取りかかり、早めに昼食をとる。その後、給仕役になり、保育者の見守る中、昼食の準備。
14時00分～	設定保育活動 (レクリエーション活動)
16時30分～	保護者が迎えに来る (両親で迎えにくる場合が多い)。



写真2：給仕役の女の子

る。「しつけ」は、人との相互の関わりの中でさまざまな生活を経験するからこそ意味をなすものである。このことをモンテッソーリ協会では「共存」という言葉を用いて説明された。特にイタリアは、多民族国家で異文化の人々とどのように「共存」するかという大きな課題をもっている。「共存」するためには、マナーや社会規範を守らなければならない。マナーや社会規範は、お互いの気持ちを理解することを通してはじめて獲得することができる。しかし、現代の日常生活の中では、多様な人と関わる経験が少なくなっている。ここにいま改めて、集団保育の中での「しつけ」に重点をおく意義があるという。

実際の保育の場面では、例えば、写真2のような食事の準備の中で「しつけ」が行われていた。ここでは、イタリア文化のテーブルマナーを、3歳児から学ぶ機会を与える。

給仕役の子は、他の幼児が昼食をとる前に食事を速やかにとり、後から来る幼児にサービスをする準備をする。さらに、他の子どもが食べ終えた皿を台所に運び、次に魚料理を配膳するなど、食事中にわたってサービスを提供する。給仕する側もされる側も、お互いの気持ちを理解する良い機会になっているという。これは10時30分から14時まで、小学生と交代しながらじっくりゆっくり行われる。日常保育プログラムの中で、もっとも力を入れている活動の一つである。給仕役は交代で、全員の幼児が経験を通して食事のマナーを獲得していく。

保育者は、3歳児だからと手加減をしない。厳しきまなざしで幼児を見つめている。配膳中に幼児が遊ん



写真3：異年齢で役割分担

でしまうと、保育者から厳しい言葉が発せられる。例えば、ナイフやフォーク、グラスを小さな片手で静かに一つずつ置くことを指導される。その「型」を間違えると保育者から厳しく指導され、やり直すと言われる。3歳児でも、静かにマナーを守り、給仕を行っていた。

この活動は、個人個人の技量の獲得だけではなく、幼児同士の関わりも深めていく。配膳することは、3歳児にとっても可能であるが、スプーンやフォーク、ナイフを正確にテーブルの人数に合わせて数え、お盆にのせるのは、数を数える力が育っていないと難しい。写真3のように、3歳ができないことは4歳のお兄さんお姉さんが、さらに4歳ができないことは5歳のお兄さんお姉さんが手助けをする。モンテッソーリ教育は、基本的には個々のマナーの獲得を尊重しながら、無理な場合は、年上の幼児が、年下の幼児を導いていた。食事をする側も、一つのテーブルに一つの大皿が置かれ、パンや野菜、肉などの種類別に盛られているものを、友だちと分け合って食べることを経験する。

ここでは食事のみを事例として取り上げたが、モンテッソーリメソッドが行う、集団保育を通しての「しつけ」は、日常生活の中での具体的な人との関わりの中でしか、学ぶことのできない社会規範を学ぶことができるという意味で、現代の幼児が経験することの少ない機会を提供しているプログラムであるといえよう。

5. イタリアの幼児教育における生活体験学習

先にも述べたように、イタリアの子育ては、家庭が中心であり、「しつけ」の第一義的責任は、親に委ねられていた。しかし日本と同様、イタリアにおいても産業構造の変化による家庭の教育力低下が指摘されており、「しつけ」についても一つ一つ丁寧に幼児教育施設によって獲得させていくことが、あらたな課題となっている。長い歴史を持つモンテッソーリ教育では、現代の幼児のおかれている時代状況、生活様式を考慮し、集団の保育施設においてしか体験できない「しつけ」の意義を、あらためて評価しはじめている。社会規範やマナーを獲得する過程で、「異文化が共存する」ための力を獲得させるという課題も、幼児が理解できるように援助されている。

また、親や地域の人々との連携を容易にし、その地域の生活に沿う形で、保育内容が創り上げられているのは、地域へのアイデンティティを形成する民主的組織による社会的運営という思想が大きな役割をになっているといえる。つまりイタリアの幼児教育に対する、家庭や地域の連携による支援は、日常生活を丸ごと支える思想を基盤として成り立っているといえる。

最後に、本調査に際して、不慣れなイタリアの地で、ご多忙にも関わらず、親身に調査に同行して下さった、通訳の佐藤氏に、感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

* 本稿は、文部科学省研究費補助金調査基盤研究(B)「子どもの心と身体の発達を促す生活体験学習の実証的研究」(研究代表者・南里悦史)において、筆者が古賀倫嗣氏(熊本大学)と井上弘人氏(熊本学園大学)



写真4：異文化の共存

と共に行ったイタリアの幼児教育調査の一部である。

注

- (1) 北原敦・清水廣一郎編「概説イタリア史」有斐閣選書、1988年など参照。
- (2) イタリアにおける幼児教育施設は、0～2歳の保育所、3～5歳の幼稚園に分かれている。運営時間によって、フルタイム保育(7時30分～17時30分)とパートタイム保育(一時保育、7時30分～14時)に分かれている。保育実施期間は、9月の第2週から6月である。
- (3) 小林文人・佐藤一子『世界の社会教育施設と公民館一草の根の参加と学びー』エイデル研究所、2001年9月、189頁参照。
- (4) 2003年10月3日「人民の家」施設長への聞き取り調査による。
- (5) 施設運営内訳は、国立10%、市営67%、認可私立20%、無認可3%となっており、全53カ所である。(2002年データ)
- (6) 2003年10月3日ボローニャ市保育行政課長聞き取り調査による。
- (7) ロバート・D・パットナム著・河田潤一訳「哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造—」NTT出版、2001年9月、26頁11行引用。
- (8) 前之園幸一郎「第9章 イタリアの保育の現状と課題」日本保育学会50周年記念出版『諸外国における保育の現状と課題』世界文化社、1997年、237頁参照。
- (9) (8)と同書、236頁引用。
- (10) (8)と同書、236頁引用。
- (11) 2003年9月30日～10月1日イタリアモンテッソーリ協会、国立「子どもの家」聞き取り調査による。
- (12) 西本順次郎編著「新しいモンテッソーリ・メソッド」明治図書出版株式会社、1981年参照。
- (13) (12)と同書参照。